

# クライアントとセラピストの関係の違いが箱庭表現に及ぼす影響についての一考察

— 箱庭療法の臨床事例で起きたある出来事を手がかりに —

石 原 宏

〔抄 録〕

本稿では、箱庭療法で重視されるクライアントとセラピストの関係について、その違いがクライアントの箱庭表現にどのような影響を与えるのかという観点から、考察を行った。筆者がセラピストとして箱庭療法を行っていたクライアントとの事例経過の中で、クライアントが、関係の異なる別の人物との間で箱庭を作ったという偶然的出来事を考察の出発点として提示し、そのとき作られた箱庭と筆者との面接過程で作られた2つの箱庭（箱庭#1、箱庭#12）を比較検討することで、箱庭表現に与えるクライアントとセラピストの関係の影響を考察した。考察の最後に、イントラパーソナルな要因（クライアント個人に属する要因）とインターパーソナルな要因（クライアントとセラピストの関係の要因）の2つの要因を掛け合わせたところに箱庭表現を位置づけることができると仮説的に考え、2つの要因のマトリックスに本稿で取りあげたクライアントの箱庭表現を素描的に位置づけることを試みた。

キーワード：箱庭、クライアントとセラピストの関係、（使用されたアイテムの）共通性、イントラパーソナルな要因（クライアント個人に属する要因）、インターパーソナルな要因（クライアントとセラピストの関係の要因）

## I 問題と目的

### 1. 箱庭療法におけるクライアントとセラピストの関係

箱庭療法（Sandspiel Therapie / Sandplay Therapy）の臨床実践においては、クライアントとセラピストの間に十分な信頼関係が築かれていることが何よりも重視される。現在、日本で広く普及している箱庭療法は、言うまでもなく、Kalff, D. M. (1966 / 1972) の Sandplay Therapy を河合（1966）が紹介したものであるが、Kalff は、Lowenfeld, M. (1939) の The World Technique をベースに Sandplay Therapy を発展させた。The World

Technique から Sandplay Therapy へと技法的な展開がなされたときに、新たに加わった重大な変化の一つが、クライアントとセラピストの信頼関係の重視であった。Lowenfeld は、当時ロンドンで主流であった Klein, M. や Winnicott, D. W. など精神分析家によるプレイセラピーが転移と解釈を重視することに異議を唱え、転移や解釈がなくとも子どものプレイセラピーは可能であるとの主張を持っていた。そのため、彼女が設立した ICP (the Institute of Child Psychology) では、子どものプレイセラピーの担当セラピストを敢えて毎回交代にしていたという (Mitchell R. R. & Friedman H. S., 1994)。世界技法もこうした治療構造の中で行われており、子どもは、毎回交代するセラピストのもとで彼らの世界を作っていたことになる。Lowenfeld は、こうした構造で治療を行うことで、特定のセラピストとの間に特別な関係が形成されていなくても、子どもの治療が可能であることを示そうとしたのである。

それに対し、Kalf は、子どものセラピーにおけるセラピスト（あるいは分析者）の任務を、「自由であると同時に保護された1つのある空間 (freien und zugleich geschützten Raum) をわれわれの関係の中に作り出すということ」(カルフ, 1972, p.10) であると捉え、こうした空間が治療的セッティングの中に作り出されるためには、セラピストに完全に受容されていると子どもが感じることのできるほどの信頼関係が築かれることが重要であるとした。そうしたこともあり、Sandplay Therapy は、一人のセラピストが毎回継続して子どもを見ていくという構造のもとで行われる。セラピストは、「毎回の Sandplay の中に浮かび上がった象徴を作品のすべての流れの中で解釈する」(カルフ, 1972, p.17) のであるが、こうした、いわゆる、作品の系列的な理解が、「治療的影響を及ぼす分析者と子どもとの間に存在する信頼の雰囲気、つまり一種の〈母と子の一体性〉を作り出す」(カルフ, 1972, p.17) としている。Sandplay Therapy において、子どもがネガティブな傾向や破壊的な傾向も含めてどんなものでも自由に表現できるためには、子どもとセラピストとの間に〈母と子の一体性〉と呼ばれるような信頼関係が築かれていることが重要であり、またそこで表現されたことをセラピストが全体の流れの中で適切に理解していくことが、この信頼関係をさらに深めていくという相互作用が想定されている。このように、クライアントとセラピストの関係は、Kalf の Sandplay Therapy にとって欠くことのできない必須条件となっていると言えるだろう。

河合もまた、箱庭療法を行う基本的立場を表明して「箱庭は治療者と被治療者との人間関係を母胎として生み出された一つの表現として考えている」(河合, 1969)、あるいは、「治療者とクライアントの関係を重視し、それを基礎としてクライアントが作った箱庭の作品を、彼の「世界」の表現として、あくまでも尊重してゆこうとするものである」(河合, 1982) と述べるように、クライアントとセラピストの関係を何よりも重視している。「結局、この関係が成立すれば、別に箱庭など無くとも治療は進展すると言ってもよいほどである」(河合, 1982) とさえ述べ、箱庭を作ること以上にクライアントとセラピストの関係が成立することが、箱庭療法の重要なポイントとなることを示している。河合 (1985) はまた、箱庭療法の

土台となるクライアントとセラピストの関係を「深い転移」という言葉で表し、箱庭療法の治療が進展するためには、「自らの無意識へと深く沈んでゆく」ような次元でのセラピストの関与が必要となってくると述べている。

「深い転移」とよく似た観点から、Bradway K. は、Sandplay Therapy におけるクライアントとセラピストの関係で起きてくる転移を“co-transference”という言葉で呼び、Sandplay Therapy においてはクライアントのものとも、セラピストのものとも断定できない両者から出てきたものとしての転移が起きていることを指摘している (Bradway K. and McCoard B, 1997)。Bradway のこの指摘もまた、Sandplay Therapy が、クライアント単独で行われるものではなく、クライアントとセラピストの関係の中で展開していく点を捉えていると理解できるだろう。

## 2. 本稿で論じる問題

このように、箱庭療法／Sandplay Therapy においては、クライアントとセラピストの関係が何よりも重視されており、この関係を土台にしてクライアントは箱庭表現を行っていきと考えられている。箱庭表現は、クライアントが作るものでありながら、クライアント単独の表現ではなく、クライアントとセラピストの関係が反映された表現であると捉えられているのである。

こうした捉え方からすると、土台となるクライアントとセラピストの関係が異なれば、クライアントの箱庭表現は当然違ったものになってくると考えることができる。では、クライアントとセラピストの関係が異なれば、クライアントの箱庭表現はどのように異なるのか。本稿では、この問題に取り組んでみたい。

このことを検証するためには、同じクライアントが、関係の異なるセラピストのもとで箱庭を作る状況が必要となる。それも箱庭表現の変化が時間の経過によるものではないことを示すためには、できる限り同時期に箱庭を作ることが必要になる。同じクライアントが、関係の異なるセラピストのもとで、できる限り同時期に箱庭を作るという状況は、臨床的には極めて不自然な状況であり、臨床事例を通してこのことを例証するのは、普通は困難であろう。

ところが、この問題について考察していく手がかりとなると思われるある出来事に、筆者は、臨床事例の経過の中で偶然遭遇することができた。本稿では、その「出来事」を提示することで、箱庭療法におけるクライアントとセラピストの関係の違いが箱庭表現に与える影響について考察したい。

なお、基礎的研究によって、この問題を検証しようとした研究はこれまでのところ非常に少なく、箱庭制作への立会人の異同が、同一人物によって作られた2回の箱庭作品のマッチング課題に影響を与えることを示した齋藤 (1991) の研究、および、異なる関係の2人のセラピストのもとで同時期に箱庭を制作した著者自身の体験を分析した中道 (2010) の研究が挙げられる程度である。

### 3. 本稿の目的

本稿では、筆者が臨床事例において遭遇した、ある「出来事」を提示し、そこで作られた箱庭作品を比較しながら分析していくことで、クライアントとセラピストの関係の違いがクライアントの箱庭表現にどのような影響を与えるのかについて、考察していくことを目的とする。本稿で目指す到達点は、提示した臨床的事実から導き出せる範囲で、クライアントとセラピストの関係の違いが箱庭表現に与える影響について素描的な仮説を提起することである。

## Ⅱ 臨床事例におけるある出来事の提示

### 1. 臨床事例で起きたある出来事

その出来事は、Aさんとの箱庭療法を中心とした臨床心理面接の経過の中で起きた。Aさんは、ある入所型の施設で生活していた女性で、この施設にセラピストとして定期的に訪問していた筆者と2週に1回のペースで面接を行っていた（注1）。なお、この施設は一時的な入所施設であり、初回面接からAさんが施設を退所するまでの6か月間に、全14回の面接を行った。Aさんは、筆者との面接経過で、初回から最終の14回目のセッションまで毎回1つずつ、計14個の箱庭を作った。

Aさんとの面接を始めて5か月が経った頃、12回目のセッションが予定されていた日に、筆者が、いつも面接で使用している部屋に出勤すると、誰が作ったのか分からない箱庭が残されていた。当時、この施設で箱庭を用いた臨床心理面接を行っていたのは筆者しかいなかったため、誰が作ったのかが分からない箱庭が残されているという状況は、筆者にとっては非常に不思議なことであった。

Aさんは、筆者との初回面接で箱庭を作って以来、毎回のセッションで必ず箱庭を作っていたため、この日のセッションでも箱庭を作ることが予想された。作者不明の箱庭が残されていることに気づいた時点で、すでにAさんとの面接開始時間が迫っていたこともあり、このままにしておくわけにはいかないと判断し、筆者は、「いったい、誰が、いつ作ったのだろう？」という疑問を持ちながらも、残されていた作品を念のために写真に撮って、片づけることにした。その箱庭（以下、箱庭Xと呼ぶ）が写真1である。



写真1 箱庭X

箱庭Xについては、筆者が立ち会った箱庭ではないため、制作者がそれぞれのアイテムに込めた意図などについては、不明である。したがって、ただ置かれているものを記述するのみになるが、箱庭の中央付近が、柵で囲まれていて、手前中央部分に開口部がある。柵に囲まれた中を左から右に見ていくと、赤ん坊が寝ているベビーベッド、ベビー箆笥、テーブル1脚とハート型背もたれのイス2脚、テレビ、シャワーカーテン、バスタブ、シャワー、トイレが置かれている。開口部に木が2本、テーブルの左隣りに白い花が置かれている。柵の外側、手前は両隅に花の咲いた木が2本、その間に小ぶりの丸い樹冠の木が左2本、右2本、木と木の間には左からイモ虫、リス、タヌキが置かれている。柵の外側左は車が4台置かれ、奥にはピンクの屋根の家1軒と商店が2軒、4本の木が置かれている。

## 2. 箱庭Xの謎

箱庭Xの謎は、直後のAさんとの面接で明らかになった。Aさん曰く、「昨日、B先生との面談があって、そのとき箱庭を作ったんです。」とのこと。つまり、箱庭Xは、筆者との面接の前日に、施設のスタッフであるB先生の前で、他でもないAさんが作ったものだったのである。

B先生は、心理臨床を専門とするスタッフではなく、面談は1か月後に迫ったAさんの退所後の生活指導を目的としたものであった。筆者が使っていた面接室で面談が行われたのも偶然だったようである。Aさんに確認したところ、B先生は管理職のスタッフであるため、Aさんとは日常接する機会はほとんどなく、個別の面談を受けたのは初めてのことであり、当然B先生の前で箱庭を作ったのも初めてだったとのことであった。B先生自身、箱庭療法についてはよく知らなかったようなのだが、筆者との面接でAさんが箱庭を作っていることを聞き、その場で箱庭を作ってみよう促されたとのこと、Aさんがそれに応じたということであつたらしい(注2)。

なお、前述のとおり、Aさんとの面接開始前に片づけてしまっていたため、Aさんがこ



うした話を聴かせてくれたときに、面接室に箱庭 X は残っていなかった。その箱庭がいついさきほどまでこの面接室に残されたままになっていて、それを筆者も見ただということ、この回に作る A さんの箱庭に影響を与えてしまうことを考慮して、A さんには伝えなかった。

### 3. 箱庭 X と筆者との 12 回目のセッションで作られた箱庭 # 12

箱庭 X にまつわる上述のような経緯が語られたのは、12 回目のセッションの前半でのことである。セッション後半では、A さんは、いつものように筆者との間で箱庭に取り組んだ。写真 2（箱庭 # 12）が、このとき A さんが作った箱庭である。



写真 2 箱庭 # 12

箱庭 # 12 を作りはじめる前に A さんは、「昨日 B 先生の面談で箱庭を作ったときに、恐竜とかがいる（恐竜のミニチュアがある）のを見つけました」と言い、恐竜のミニチュアをメインにした箱庭を作っていた。恐竜のほかに、右手前から中央にかけて、陸ガメ、カニ、アンモナイト 2 個、貝殻 3 個、ブラックバスなどが置かれ、手前の両隅と奥の枠沿いに木や草などの植物が計 6 本置かれている。出来上がった箱庭をじっくりと見つめていた A さんに〈どんな感じがする？〉と尋ねてみると、「なんかこの時代が本当にここにあるみたい」としみじみと語り、思っていた以上の出来栄になったことに満足した様子であった。

筆者は、箱庭 X と箱庭 # 12 という A さんが連日作った 2 つの箱庭を、偶然、同じ日に見ることになったわけであるが、2 つの箱庭が、使用されたアイテムという点でも、構成という点でも、かなり異なったものであることに、強く印象づけられた。

## Ⅲ 考 察

### 1. 箱庭 X と箱庭 # 12 についての検討

#### (1) 箱庭 X と箱庭 # 12 についての状況整理

上述の臨床事例における「出来事」の中で取り上げた箱庭 X と箱庭 # 12 について、状況を整理すると以下ようになる。

- 〈1〉箱庭 X と箱庭 # 12 を作ったのは、どちらも A さんである。
- 〈2〉箱庭 X と箱庭 # 12 は、同じ面接室で作られた。
- 〈3〉箱庭 X が作られた翌日に箱庭 # 12 が作られた。
- 〈4〉箱庭 X は施設スタッフの B 先生との面談の中で作られた。
- 〈5〉A さんが B 先生の面談を受けたのは箱庭 X を作ったこのときが初めてであり、箱庭 X は B 先生との間で作られた初めての箱庭であった。
- 〈6〉箱庭 # 12 はセラピストである筆者との面接の中で作られた。
- 〈7〉A さんは筆者との間で2週間に1回のペースで5か月間面接を続けており、毎回のセッションで1つ箱庭を作ったため、箱庭 # 12 は筆者との間で作られた12個目の箱庭であった。
- 〈8〉箱庭 X と箱庭 # 12 を同日に見た筆者は、2つの箱庭が、かなり異なったものであるとの印象を受けた。

## (2) 論点の整理

まずは、上記の〈1〉～〈7〉について検討しよう。〈1〉～〈5〉は、12回目のセッション中に A さんから語られた内容にもとづいており、〈6〉、〈7〉は、筆者自身が直接関与した内容である。

〈1〉で確認したいのは、2つの箱庭が一人のクライアントによって作られたことである。つまり、箱庭 X と箱庭 # 12 は、まったく無関連のものではなく、同じクライアントが作ったという点で関連を持ち、比較検討することに意味があるということである。

〈2〉で確認したいのは、2つの箱庭が同じ面接室の同じ砂箱、同じ砂、同じアイテムというセッティングの中で作られたことである。つまり、2つの箱庭は、箱庭療法用具という点では同一の条件のもとで作られたということである。

〈3〉で確認したいのは、箱庭療法が多くの場合、週に1回の臨床心理面接の枠内で行われ、1回のセッションで1つの箱庭が作られるのが一般的である（箱庭が作られないセッションを挟むことも一般的である）ことを考えると、2日連続で作られた2つの箱庭は、時間的な連続性という点からみると極めて連続性が高いということである。また、A さんと筆者との面接は、2週間に1回のペースで行っていたため、筆者との間で作られた A さんの箱庭は、どれも2週間ごとに作られた。このように A さんという個別的な事例内で見えた場合も、2日連続で作られた2つの箱庭は、時間的な連続性が極めて高いと言える点も確認しておきたい。

〈4〉〈5〉で確認したいのは、箱庭 X が、初めて面談をする B 先生との間で、初めて作

られた箱庭であったことである。また、筆者との12回目のセッションで、AさんはB先生とは日常での関わりが薄かったことが確認できている。

〈6〉〈7〉で確認したいのは、箱庭#12が、5か月にわたり面接を続けてきた筆者との間で作られた12個目の箱庭作品であったことである。12回目までの面接の中で、筆者は継続してAさんの内面の語りも聴き、毎回箱庭作りも見守ってきた。

以上〈1〉～〈7〉を総合すると、《箱庭Xと箱庭#12は、同じ一人のクライアントAさんが、同じ面接室で、同じ箱庭療法用具のもと、時間的連続性の極めて高い状況で作った箱庭であるが、AさんとB先生、Aさんと筆者という異なる関係の中で作られた箱庭である》ことを確認することができるだろう。これは、Iの2. で述べた「同じクライアントが、関係の異なるセラピストのもとで、できる限り同時期に箱庭を作るという状況」に合致する状況であると言ってよいだろう。こうした臨床的には極めて不自然な状況が、ここでは偶然にも作り出されており、クライアントとセラピストとの関係の違いが箱庭表現にどのような違いを生むのかを考察する格好の「事例」であると言えるだろう。

一つ残った状況〈8〉については、筆者の主観的な印象であり、このままでは考察を進める論拠としては不十分である。したがって、「2つの箱庭が、かなり異なったものである」という印象がどこから生じてきたのかをなるべく客観的な手がかりから捉える努力が必要となるだろう。以下、この点について探っていく。

### （3）使用されたアイテムからみた箱庭Xと箱庭#12

#### a. 箱庭Xと箱庭#12の共通アイテムについて

ここでは、使用されたアイテムの共通性という観点から箱庭Xと箱庭#12を検討してみよう。箱庭Xと箱庭#12は、同じ面接室、同じ箱庭療法用具という条件下で作られているため、類似性（似ている - 似ていない）を判断する手がかりとして、共通に使われたアイテム（以下、「共通アイテム」とする）に注目するのは、妥当であると考えられる。

箱庭Xと箱庭#12の共通アイテムはヤシの木、赤い実のなる木、黄色い実のなる木の3個であった。箱庭Xで使用された総アイテム数が45個、箱庭#12で使用された総アイテム数が21個であることから、共通アイテムの3個は、箱庭Xの6.67%、箱庭#12の14.29%にあたる。逆に言うと、箱庭Xの93.33%、箱庭#12の85.71%は共通のアイテムではないことを示している。また、3個の共通アイテムがすべて木であり、箱庭Xにおいても、箱庭#12においても、写真1、写真2の方向から見て砂箱の奥側の枠沿いを飾るように置かれていて、表現の中心となるメイン・アイテムではないことも押さえておきたい。

#### b. 各回の箱庭と箱庭Xおよび箱庭#12との共通アイテムについて

使用されたアイテムという観点から箱庭Xと箱庭#12の特徴をさらに明らかにするために、筆者との面接でAさんが作った各回の箱庭と箱庭Xおよび箱庭#12の共通アイテム数、



および各回で使用された総アイテム数を表1に示した。

表 1. 各回の箱庭と箱庭 X・箱庭 # 12 との共通アイテム数と各回の総アイテム数 (個)

箱庭	#1	#2	#3	#4	#5	#6	#7	#8	#9	#10	#11	X	#12	#13	#14
箱庭Xとの共通アイテム数(個)	18	15	3	11	3	7	13	2	4	0	3	—	3	1	2
箱庭#12との共通アイテム数(個)	1	0	3	2	0	4	4	3	2	0	1	3	—	2	0
各回の総アイテム数(個)	75	68	69	47	14	27	55	49	24	9	47	42	21	6	33

表1から、箱庭 X と各回の箱庭との共通アイテム数は、最小値 0 (箱庭 # 10)、最大値 18 (箱庭 # 1)、中央値および最頻値はいずれも 3 (箱庭 # 3、# 5、# 11、# 12) となっていることが読み取れる。箱庭 X と箱庭 # 12 の共通アイテム数 3 個という数値は、箱庭 X と各回の箱庭との関係で見た場合、中央値かつ最頻値であって、多くもなく少なくもなく、最もよく見られた数値ということになる。ただし、箱庭 # 1、# 2、# 4、# 7 のように箱庭 X と 10 個以上の共通アイテムが使用されている箱庭も存在することと比較すると、箱庭 # 12 は、箱庭 X との共通アイテムが比較的少ない箱庭であると言えるだろう。

同じく表1から、箱庭 # 12 と各回の箱庭との共通アイテム数は、最小値かつ最頻値が 0 (箱庭 # 2、# 5、# 10、# 14)、最大値 4 (箱庭 # 6、# 7)、中央値 2 (箱庭 # 4、# 9、# 13) となっていることが読み取れる。箱庭 # 12 は、共通アイテム数が 0 ~ 4 個の間におさまっており、回ごとのばらつきが少ない。つまり、箱庭 X との比較で言えば、箱庭 # 12 は他のどの箱庭ともあまり「似ていない」箱庭であると言えるだろう。

箱庭 X と箱庭 # 12 で、当該 2 つの箱庭を除く各回の箱庭 (# 1 ~ # 11、# 13、# 14) との共通アイテム数に差があるかどうかを検定するため Wilcoxon の符号付順位検定を行ったところ、箱庭 X の方が箱庭 # 12 のよりも有意に共通アイテムが多かった ( $Z=2.68$ ,  $p < .01$ )。先に状況を整理したように、箱庭 X は、A さんとの関係が薄い B 先生との間で初めて作られた箱庭であり、箱庭 # 12 は、筆者と継続した関係を築いてきた中で作られた箱庭である。単純に考えると、各回の箱庭との共通アイテムは、面接における関係が継続している筆者との間で作られた箱庭 # 12 の方が多く、B 先生との間で初めて作るようになった箱庭 X の方が少ないという結果になりそうなものである。しかし、実際の結果は、逆で、関係の薄い B 先生との間で作られた箱庭 X の方が、筆者との面接で作られた他の箱庭との共通アイテム数が多かったのである。

この結果が意味するところを考えるために、箱庭 X と共通アイテムの多い箱庭が、# 1 (18 個)、# 2 (15 個)、# 4 (11 個)、# 7 (13 個) と、面接過程の前半に偏っている点に注目したい (表 1)。# 1 ~ # 7 を前半、# 8 ~ # 14 を後半に分けたとき、前半と後半で箱庭 X との共通アイテム数に差があるかどうかを検定するため Mann-Witney の U 検定を行ったところ、前半の方が後半に比べ有意に共通アイテム数が多かった ( $U = 4.00$ ,  $p < .01$ )。このことは、箱庭 X が、筆者との面接経過で言えば後半にあたる時期 (# 12 の直前) に作ら

れたものでありながら、共通アイテムという観点から見ると、筆者との面接経過の前半の箱庭群と類似性が高い箱庭であることを示している。

### c. 客観的手がかりを踏まえた状況〈8〉の検討

以上のような客観的手がかりをもとに、上述の状況〈8〉について考えてみよう。状況〈8〉は、「箱庭 X と箱庭 # 12 を同日に見た筆者は、2つの箱庭が、かなり異なったものであるとの印象を受けた。」というものであった。箱庭 # 12 は、他のどの箱庭とも共通アイテムが少なく、使用されたアイテムという点では他とはかなり異なった箱庭であったわけであるから、箱庭 X と箱庭 # 12 が「かなり異なったものである」という印象が生じたのは、箱庭 # 12 の側の持つ特徴が主な要因となったわけではなさそうである。では、箱庭 X の持つ特徴はどうか。先ほど見たように、箱庭 X は、箱庭 # 12 よりも他の各回の箱庭と共通アイテム数が有意に多く、中でも筆者との面接過程の前半（# 1～# 7）に作られた箱庭に共通アイテムが有意に多かった。このことを、筆者との面接過程の時系列の中で捉えてみると、初回面接から2か月半後の7回目のセッションまで（特に# 1、# 2、# 4、# 7）は、のちに箱庭 X で使用されることになるアイテムと共通のアイテムが多数使用されていたのであるが、8回目以降のセッションではそれらのアイテムはあまり使われなくなっていく。その後、箱庭 # 8、# 9、# 10、# 11 が作られた2か月間にわたる4セッション連続であまり使われなかったアイテムが、12回目のセッションの直前に B 先生との間で作られた箱庭 X では、まるで復活したかのように多数使用された。そうした「復活」が B 先生との間では起きたにもかかわらず、筆者との面接では、その後の箱庭 # 12、# 13、# 14 においても箱庭 X に使用されたアイテムはほとんど使われることはなかった。結局、筆者との面接過程で作られた箱庭だけを見ると、8回目から14回目（最終回）までの3か月半、面接過程の前半で使用され、箱庭 X でも多数使用されたアイテムは、ほとんど使われなかったことになる。

すなわち、箱庭 X は、筆者との面接過程前半で使用されたアイテムと共通のアイテムが多数使用されたというまさにその点で、筆者との面接過程の連続的な流れにおいては、非常に異質な箱庭であったわけである。この点が、箱庭 X に関して注目すべき最大のポイントということになるだろう。

ここまで検討してみると、箱庭 X と箱庭 # 12 が「かなり異なった作品である」という筆者の印象は、箱庭 X の持つこうした異質さから生じていたと理解することができる。《箱庭 X と箱庭 # 12 は、同じ一人のクライアント A さんが、同じ面接室で、同じ箱庭療法用具のもと、時間的連続性の極めて高い状況で作った箱庭であるが、AさんとB先生、Aさんと筆者という異なる関係の中で作られた箱庭》であったが、この場合、関係の違いは、面接を重ねる中で筆者との間ではすでに使用されることが少なくなっていたアイテムが、B先生との間で初めて作った箱庭 X に多数使用されたという形で、箱庭表現に影響を与えていたと、

まとめることができるだろう。

## 2. 箱庭Xと箱庭#1についての検討

### (1) 箱庭#1について

前節の検討を通して、箱庭Xは、筆者との面接過程の前半(#1~#7)に使用されたアイテムと共通のアイテムが多数使用された箱庭であったことが、分かってきた。ここでは、中でも最も共通アイテムの多かった箱庭#1を提示し、箱庭Xと比較して検討したい。



写真3 箱庭#1

箱庭#1は、筆者との初回面接で作られた箱庭である。Aさんと筆者の初回面接は、最初の5分ほどで互いの簡単な自己紹介とAさんの来談動機、および施設の生活の中での筆者との面接の位置づけなどに関して簡単にやり取りをした後、Aさんの希望でさっそく箱庭を作ることになった。Aさん曰く、この施設に入所する前に2~3回箱庭を作ったことがあったとのことで、筆者との面接でも初回から箱庭を作るのが楽しみだったのだと言う。結局、そのままセッション終了までの45分をほぼすべて使って作られたのが、箱庭#1(写真3)である。

この箱庭は、柵を用いて図1に示したような2つの領域に分けられており、左側の領域に家の中の様子が、右側の領域に家の外の様子が作られている。



図1 箱庭#1の領域分割

使われたアイテムの詳細を示すと、家の中、砂箱の中央辺りに机に向かって着席しノートを広げて学習しているような姿をした男の子と女の子がいる。その奥側に、ベビー筆筒、ちゃぶ台、イス、ピアノ、流し台、食品貯蔵庫、テレビなどの家具が並べられている。そのさらに左側はシャワーカーテンで仕切られて、トイレ、鏡、バスタブ、シャワー、洗面台などが置かれたバスルームが作られている。左手前には、学習机とベビーベッドがあり、ベビーベッドの中にはイルカが置かれている。左手前の隅には星形をした石が置かれ、その石の上に赤ん坊が立っている。

家の中と外を仕切る右側の柵には、アーチ状の開口部があり、その開口部に向かうようにして、帽子をかぶった男の子と白い頭巾をつけた女の子が置かれている。右手の奥側と手前側には1軒ずつ家が置かれていて、それぞれの家に車が1台ずつ置かれている。2軒の家の周りの空間には、さまざまな大きさ・色・形の木々や花々が置かれている。また、右手前に置かれた家の傍には、白蛇が1匹置かれている。中央手前には2両編成の電車と駅舎が置かれ、駅のホームにはニワトリが3羽とスーツを着た女性がいる。また駅の出入り口側には、作業着姿の男性と、赤ん坊が乗ったベビーカー、ベビーカーを押すような位置にワンピースを着た女性、その傍らに男の子と女の子、さらに犬が1匹置かれている。

作り終えたAさんは、この箱庭を「朝の場面」であると説明した。また、この施設に来る以前に箱庭を作ったときには、「お風呂を置きたかったのに、お風呂のおもちゃがなかったから残念だった」と言い、「今日はお風呂があったのでよかった」と話した。

## （2）箱庭Xと箱庭#1の共通アイテムについて

前掲表1に示したように、箱庭Xと箱庭#1の共通アイテム数は、18個であった。箱庭Xで使用された総アイテム数が45個、箱庭#1で使用された総アイテム数が75個であることから、共通アイテムの18個は、箱庭Xの40.0%、箱庭#1の24.0%にあたる。具体的には、赤ん坊、ベビーベッド、ベビー筆筒、ハート型背もたれのイス1脚、テレビ、シャワーカーテン、バスタブ、バスマット（白）、バスマット（ピンク）、シャワー、トイレ、白と緑の柵2個、茶色の柵2個、ピンクの屋根の家、ヤシの木、白い花の18個が2つの箱庭の共通アイテムであった。

箱庭X（写真1）で、柵に囲まれた中に置かれた14個のアイテムのうち、テーブル1脚とハート型背もたれの椅子1脚を除いた12個のアイテムが、箱庭#1で使用されていたアイテムであった。柵に囲まれた中の領域に共通アイテムが多数使用されていることが分かる。箱庭Xと箱庭#12の共通アイテムが3個でしかも3個ともに木であったことと比較して、箱庭Xと箱庭#1は、ただ共通アイテムが多いだけでなく、表現のメインとなるアイテムが多数共通して使用されている。また、柵によって領域を区切り、その中と外を表現しているという構成の面でも、箱庭Xと箱庭#1は類似していると言えるだろう。

### (3) 箱庭 X と箱庭 # 1 についての状況整理

箱庭 X と箱庭 # 1 について、箱庭 X と箱庭 # 12 との比較と対応させて状況を整理すると以下のようになる。

- 〈1〉箱庭 X と箱庭 # 1 を作ったのは、どちらも A さんである。
- 〈2〉箱庭 X と箱庭 # 1 は、同じ面接室で作られた。
- 〈3〉箱庭 X は、箱庭 # 1 が作られてから、5 か月後に作られた。
- 〈4〉箱庭 X は施設スタッフの B 先生との面談の中で作られた。
- 〈5〉A さんが B 先生の面談を受けたのは箱庭 X を作ったこのときが初めてであり、箱庭 X は B 先生との間で作られた初めての箱庭であった。
- 〈6〉箱庭 # 1 はセラピストである筆者との面接の中で作られた。
- 〈7〉A さんと筆者が面接を行ったのは箱庭 # 1 を作ったときが初めてであり、箱庭 # 1 は筆者との間で作られた初めての箱庭であった。
- 〈8〉箱庭 # 1 は、箱庭 X との共通アイテムが最も多く、使用されたアイテムという観点では、他の各回と比較して相対的に最も箱庭 X との類似性の高い箱庭である。また、柵を用いて領域を区切るという構成面でも 2 つの箱庭は類似性を有する。

### (4) 論点の整理

箱庭 X と箱庭 # 1 についての状況を整理した〈1〉～〈8〉のうち、〈1〉、〈2〉、〈4〉、〈5〉、〈6〉の 5 つの状況については、箱庭 X と箱庭 # 12 についての状況と同一である。つまり、箱庭 # 12 と箱庭 # 1 で異なる状況は、〈3〉、〈7〉、〈8〉の 3 つである。

〈3〉は、箱庭 X と箱庭 # 1 が作られた時期には、5 か月の開きがあるということであり、時間的な連続性という点からみると、この 2 つの箱庭は、極めて連続性が低いということである。この点で、箱庭 X と箱庭 # 1 の組み合わせは、時間的連続性が高かった箱庭 X と箱庭 # 12 の組み合わせとは、性質が異なる。

〈7〉は、箱庭 # 1 が作られた時点で筆者と A さんは初対面であり、箱庭 # 1 は初めて面接する筆者と初めて作られた箱庭であったことを示している。つまり、クライアントとセラピストの間に十分な関係が築かれていないという点で、B 先生との間で箱庭 X が作られた状況と類似した状況であった、ということである。

〈8〉は、箱庭 X と箱庭 # 1 が、使用されたアイテムという観点からは、非常によく似た箱庭であり、柵を用いた領域の分割という構成の面でも類似性を指摘できる箱庭であるということである。

以上〈1〉～〈7〉を総合すると、《箱庭 X と箱庭 # 1 は、同じ一人のクライアント A さんが、同じ面接室で、同じ箱庭療法用具のもと、時間的連続性の低い状況で作った箱庭であるが、A さんと B 先生、A さんと筆者という、どちらも十分な関係が築かれていないという点で



類似した関係の中で作られた箱庭である》ことが確認でき、そこに〈8〉を加えると、こうした状況で作られた2つの箱庭が、よく似た箱庭であった、ということになる。

ここで最も注目したいのは、2つの箱庭が作られた時期に5か月もの時間的隔たりがあり、しかもこの2つの箱庭は異なるセラピストのもとで作られたにもかかわらず、箱庭Xと箱庭#1がよく似た箱庭になったという点である。つまり、この2つの箱庭の比較からは、十分な関係が築かれていないセラピストとの間で初めて作る箱庭であるという条件が、箱庭表現に強く影響を与えていることが推測できるのであり、それは時間的連続性が低いという条件よりも強く、またセラピストが異なるという条件よりも強く、クライアントの箱庭表現に作用したと考えられるのである。先に箱庭Xと箱庭#12の異質さについて考察したが、筆者との面接開始から5か月が経過して筆者との間では箱庭表現が初期とは変化してきた中で、初期の箱庭が復活したかのような箱庭XがB先生との間で作られた。この「復活」劇には、十分な関係が築かれていないセラピストの前で箱庭を作るという状況の「復活」が、強い影響を与えたのだと考えることができるだろう。このことは、クライアントはセラピストとの関係を土台にして箱庭表現を行う、というKalffや河合の主張を例証するものと言えるだろう。

### 3. 箱庭#1と箱庭#12についての検討

#### (1) 箱庭#1と箱庭#12についての状況整理

同様の観点から、箱庭#1と箱庭#12について状況を整理すると以下のようになる。

- 〈1〉箱庭#1と箱庭#12を作ったのは、どちらもAさんである。
- 〈2〉箱庭#1と箱庭#12は、同じ面接室で作られた。
- 〈3〉箱庭#12は、箱庭#1が作られてから、5か月後に作られた。
- 〈4〉箱庭#1はセラピストである筆者との面接の中で作られた。
- 〈5〉Aさんと筆者が面接を行ったのは箱庭#1を作ったときが初めてであり、箱庭#1は筆者との間で作られた初めての箱庭であった。
- 〈6〉箱庭#12はセラピストである筆者との面接の中で作られた。
- 〈7〉Aさんは筆者との間で2週間に1回のペースで5か月間面接を続けており、毎回のセッションで1つ箱庭を作ったため、箱庭#12は筆者との間で作られた12個目の箱庭であった。
- 〈8〉箱庭#1と箱庭#12の共通アイテムは少なく（表1に示したように、箱庭#1と#12の共通アイテム数は1個であった）、使用されたアイテムという観点では、この2つの箱庭は、類似性の低い箱庭である。また、構成面でも2つの箱庭は、異なっている。

## (2) 論点の整理

箱庭#1と箱庭#12についての状況を整理した〈1〉～〈8〉のうち、〈1〉〈2〉は、箱庭Xと箱庭#12、箱庭Xと箱庭#1についての状況と同一である。

〈3〉～〈7〉については、箱庭Xと箱庭#12についての状況と同一のものと、箱庭Xと箱庭#1についての状況と同一のものが混在するような形になっているが、これを総合すると《箱庭#1と箱庭#12は、同じ一人のクライアントAさんが、同じ面接室で、同じ箱庭療法用具のもと、時間的連続性の低い状況で作った箱庭であり、初回面接と5か月間面接を重ねた12回目のセッションという、同一セラピストでありながら関係が異なる中で作られた箱庭である》ことが確認できる。これに〈8〉を加えると、こうした状況で作られた2つの箱庭が、非常に異なったものであった、ということになる。

箱庭#1と箱庭#12の比較で最も注目しておきたいのは、同じセラピストのもとで作られた2つの箱庭であっても、時間的な隔たりがあれば、箱庭表現が異なったものになるということである。このことは特別なことではなく、回を重ねるにつれてクライアントの箱庭が変化していくという臨床実践では当たり前の現象を捉えたものであるが、セラピストが同じであっても回を重ねるごとに箱庭表現は変化していくというこの当たり前の事実を押さえることによって、先に検討した箱庭Xと箱庭#1が非常に似た箱庭であったことの異質さがより際立つのではないかと考えられる。このことはまた、同じセラピストのもとで箱庭を作るからこそ、回を重ねるごとに箱庭表現が変化していくのであって、単純な時間経過が箱庭表現を変化させるのではないことを示唆しているとも言えるだろう。

ここまで検討してきた箱庭Xと箱庭#12、箱庭Xと箱庭#1、箱庭#1と箱庭#12のそれぞれについて対比しながら整理してきた状況をまとめると表2のようになる。

表2. 箱庭Xと箱庭#12、箱庭Xと箱庭#1、箱庭#1と箱庭#12の状況整理

	クライアント	面接室	時間的連続性	セラピスト	クライアントとセラピストの関係	共通アイテム数	構成	箱庭表現の類似性
箱庭Xと箱庭#12	同じ (Aさん)	同じ	高い (2日連続)	異なる (X: B先生、#12筆者)	異なる (X: 初めての箱庭、#12: 12回目の箱庭)	3個	異なる (X: 枠で分割、#12: 分割なし)	低い
箱庭Xと箱庭#1	同じ (Aさん)	同じ	低い (5か月後)	異なる (X: B先生、#12筆者)	類似 (十分な関係が築けていない)	18個	類似 (枠を使用して分割)	高い
箱庭#1と箱庭#12	同じ (Aさん)	同じ	低い (5か月後)	同じ (筆者)	異なる (#1: 初めての箱庭、#12: 12回目の箱庭)	1個	異なる (#1: 枠で分割、#12: 分割なし)	低い

## IV 総合考察

以上の考察を踏まえ、クライアントとセラピストの関係の違いが箱庭表現に与える影響について、素描的な仮説を提起したい。

Kalff (1969 / 1972) が、「幾百もの小さな玩具の中から選んだものを使って子どもによって作られた箱庭の作品 (sand picture) は、ある精神的状況の3次元的表现として理解され

る。」とし、「葛藤は内的世界から外的世界へと移され、目に見えるようにされる。」と述べるように、クライアントによって作られた箱庭は、クライアントの「精神的状況」を表し、クライアントの「内的世界」が「外的世界へと移され」たものとして理解されることが一般的である。箱庭を系列的に理解するというときにも、繰り返し作られる箱庭表現の変化をクライアントの「精神的状況」の変化として、あるいは箱庭という「外的世界」の変化をクライアントの「内的世界」の変化として捉えていく。箱庭表現の変化をこのように理解する視点は、言わば、箱庭表現をクライアント個人に属するものとして捉えるイントラパーソナル intrapersonal な視点と言えるだろう。

これに対し、クライアントとセラピストの関係を土台としてクライアントの箱庭表現が行われるというときには、箱庭表現にクライアントとセラピストの関係が影響を与えているという、言うならば、インターパーソナル interpersonal な視点がある。

箱庭表現は、こうしたイントラパーソナルな要因とインターパーソナルな要因を掛け合わせたところに現れてくるものであると仮説的に捉えてみると、本稿で検討してきた箱庭 X、箱庭 # 12、箱庭 # 1 の比較は、クライアントの箱庭表現に与えるイントラパーソナルな要因とインターパーソナルな要因の関係の兼ね合いを示唆するものとして理解することができる。つまり、箱庭 X と箱庭 # 12 は、連日作られた箱庭であることから、クライアントのイントラパーソナルな要因には類似性があることが推測されるが、B 先生と筆者というインターパーソナルな要因が異なっており、結果として箱庭表現の類似性は低くなったのだと考えられる。同様に、箱庭 X と箱庭 # 1 は、5 か月の隔たりを経て作られた箱庭であることから、イントラパーソナルな要因は異なることが推測されるが、セラピストが異なるとは言えその人の前で初めて作った箱庭であるというインターパーソナルな要因に類似性があり、結果的に箱庭表現の類似性が高くなったのだと考えられる。箱庭 # 1 と箱庭 # 12 は、やはり 5 か月の隔たりを経て作られた箱庭であることからイントラパーソナルな要因は変化していることが推測され、また面接を継続する中で積み重ねられてきたものによって筆者との関係も変わりインターパーソナルな要因でも変化しており、結果的に箱庭表現の類似性が低くなったのだと考えられる。

こうした状況を踏まえ、箱庭 X、箱庭 # 1、箱庭 # 12 を、イントラパーソナルな要因とインターパーソナルな要因のマトリックスの中に素描的に位置づけてみたのが、図 2 である。

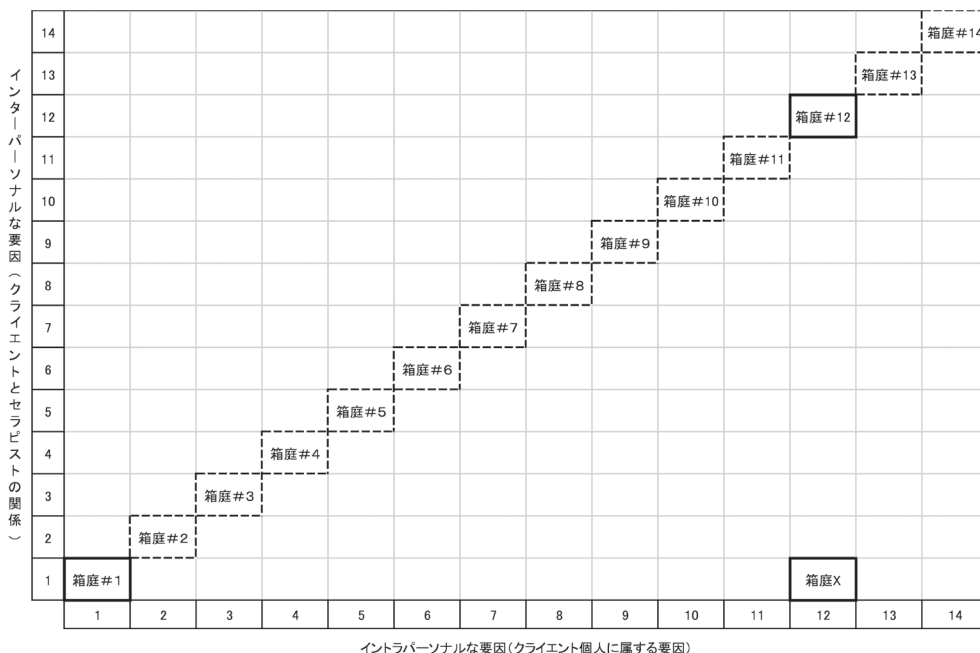


図2. イントラパーソナルな要因とインターパーソナルな要因のマトリックスにおけるAさんの箱庭の位置づけ

図2では、横軸にイントラパーソナルな要因を、縦軸にインターパーソナルな要因を置いた。イントラパーソナルな要因の1の項とインターパーソナルな要因の1の項目の交点に箱庭#1を置いて、Aさんの箱庭療法過程の出発点を表し、仮に1回のセッションごとに両要因が1段階ずつ変化していくとすれば、Aさんの箱庭表現の変化は、図の対角線上に並ぶような形で図示することができる。このようなマトリックスを考えるならば、箱庭#12は、イントラパーソナルな要因12の項とインターパーソナルな要因12の項の交点に位置づけることができる。そして、箱庭Xは、箱庭#12とほぼ同時期に作られた箱庭であり、イントラパーソナルな要因という点では箱庭#12と同じ12の項に、B先生との間で初めて作られたという点で、イントラパーソナルな要因では箱庭#1と同じく1の項に位置づけられ、結果として図2で表した位置に置くことができるだろう。このように図示することによって、箱庭Xと箱庭#1の表現の類似性、および箱庭Xと箱庭#12の表現の相違は、インターパーソナルな要因の類似性および相違からきていることを示すことができ、箱庭#1と箱庭#12の表現の相違は、イントラパーソナルな要因とインターパーソナルな要因の両要因の相違からきていることを示すことができるのではないだろうか。

最後に今後の課題を挙げておく。ここまで箱庭Xと箱庭#1は類似した箱庭であると述べてきたが、当然100%同一の表現ではなく、相違点も有している。例えば、箱庭#1では、人物が多数使われているが、箱庭Xでは人物は赤ん坊1人である点などは大きな相違点で

あるが、こうした相違に、イントラパーソナルな要因とインターパーソナルな要因の相違がそれぞれ影響を与えていると捉え、細やかな分析を行っていくことが可能であろう。この点の分析は今後の課題としたい。また、本稿では詳細を検討することができなかった A さんのその他の箱庭は、図 2 では、すべて対角線上に点線で表したが、実際には、イントラパーソナルな要因は進展しつつあるにもかかわらずインターパーソナルな要因が停滞したために対角線よりも下に位置づけるべき箱庭もあれば、イントラパーソナルな要因は進展しつつあるにもかかわらずイントラパーソナルな要因で停滞が起きて対角線の上に積み上がっていくような箱庭もあるだろう。また両要因で停滞が起これ、いつまで経ってもある特定の位置から表現が動かなくなるというようなこともあるかもしれない。A さんのすべての箱庭についてのこうした検討も、今後の課題としたい。

本稿では、臨床事例での偶然の出来事を考察の手がかりとして、同じクライアントが作った 3 つの箱庭の比較から、クライアントとセラピストの関係の違いが箱庭表現に与える影響について検討を行った。その検討をもとに、極めて素描的ではあるが、イントラパーソナルな要因とインターパーソナルな要因の 2 つの要因を掛け合わせたマトリックスによって各回の箱庭表現を仮説的に位置づけることを試みた。本稿は、まだまだ未完成な仮説の提起にとどまったが、臨床事例を通してこうした検討ができたことには意義があるだろう。今後は、さらなる臨床事例の検討を通して、仮説の肉付けを行っていくことが課題となるだろう。

#### 〔注〕

〔注 1〕 臨床事例については、本稿の目的に照らして考察に最低限必要な情報のみを記載する。

〔注 2〕 B 先生の面談は、筆者の面接と連携して行われたものではなかった。箱庭療法を行っている経過で、同じ施設の別のスタッフが、重複して箱庭を作らせるということは、臨床心理士のみが働いている現場では、まず起これ得ないことであろうし、多職種が協働する現場であっても、よく連携がとれている現場では、まず起これえないのではないかと思われるが、このときは起きてしまった。

#### 〔引用文献〕

- Bradway K. and McCoard B 1997 Sandplay — Silent Workshop of the Psyche, Routledge
- Kalff D. M. 1966 Sandspiel — Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche, Rascher Verlag (ドラ・M・カルフ著, 河合隼雄監修, 大原貢, 山中康裕共訳 1972 カルフ箱庭療法 誠信書房)
- 河合隼雄 1966 箱庭療法 (Sand-Play Technique) — 技法と治療的意義について, 京都市カウンセリングセンター研究紀要, 2, 1-9
- 河合隼雄 (編著) 1969 箱庭療法入門, 誠信書房
- 河合隼雄 1982 箱庭療法の発展, (河合隼雄, 山中康裕 (編) 箱庭療法研究 1, 誠信書房, vii-xviii 所収)
- 河合隼雄 1985 箱庭療法と転移, (河合隼雄, 山中康裕 (編) 箱庭療法研究 2, 誠信書房, iii-xi 所収)
- Lowenfeld, M. 1939 The World Pictures of children: A method of recoding and studying them, British Journal of Medical Psychology 18 (pt.1):65-101.
- Mitchell R. R. and Friedman H. S. 1994 Sandplay: past, present and future, Routledge
- 中道泰子 2010 箱庭療法の心層 内的交流に迫る, 創元社
- 岡田康伸 1969 SD 法によるサンド・プレイ技法の研究, 臨床心理学, 8(3), 151-163



齋藤 真 1991 箱庭表現に対する心理療法家の系列的理解, 心理臨床学研究, 9(1), 45-54

【付記】

本稿にまとめた臨床事例の分析の一部は、2008(平成20)年度から2010(平成22)年度の科学研究費補助金(若手研究(B))『継続的箱庭制作における体験の連続性に注目した箱庭療法の「治療的要因」に関する研究』課題番号:20730459)による助成を受けて行った。

(いしはら ひろし 臨床心理学科)

2012年10月31日受理

